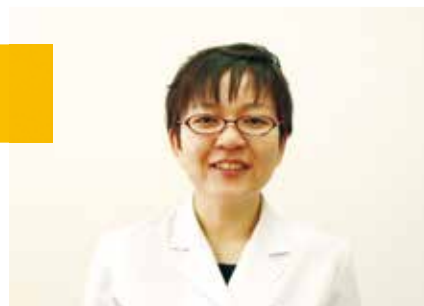


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第19回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



在宅療養の要石と言えば、ケアマネジャー（以下、ケアマネ）だろう。恥ずかしながら、利用者（患者）の方のお宅に出かけるようになるまで、彼らの役割、活躍を知らなかった。ケアマネさんのプランニング、マネジメントなしには夜も日も明けないご家庭がたくさんある。彼らは、利用者のニーズを的確に抽出し、数ある事業所とマッチングさせ、無理のない介護支援の計画を組み立てるのだ。

*

在宅医療に参入した薬局薬剤師に対し、ケアマネさんの中には、「医師との連携で困っていたので、薬局薬剤師には橋渡し役になってもらえて、とても助かる！」と喜んでくださる方もいる。その言葉の裏で、本来、薬剤師が担うべき部分をケアマネさんが行わざるをえなかった現場にも遭遇する。

たとえば、薬の月間管理、体調の確認、主治医への薬剤提案（！）、排便コントロールなどは、利用者の方のQOLに大きくかかわる問題である。「おじいさんの便が最近緩くて、おばあさんの介護負担が増大しています。緩下剤の量を調節しても良いですか?」。ご家族から当然のように出てくるこんな要望を、ケアマネさんが、ご家族に代わって医師に伝えるシーンが、そこかしこで見られる。

医師と利用者の間で取り決められていた看取りについてのインフォームド・コンセントをひっくり返し、「苦しくても生きよう!」と、積極的な治療を施すプランに変更したケアマネさんもいた。医師に却下される提案もあるが、私の尊敬するケアマネの方々は、決してめげた

りしない。医師の治療方針が、根本的に利用者のためになっているのだと理解すれば、「なるほど、わかりました。利用者の方のことを考えてくださってありがとうございます。これからもよろしくお願いします」と自らの提案を素直に引っ込めるのだ。

提案が却下されても、恥ずかしがったりしない。担当する利用者を親身に思えばこそその行動であり、自分が考えているよりも、もっとすぐれたケアプランを見出せば、自分のメンツなど気にしない——。そんなふうにいるケアマネさんたちの存在を知っている。

*

背景が非常に複雑で、介護提供プランが一筋縄ではいかない利用者のお宅では、スーパーケアマネさんに出会う。彼らは事業所を移籍する際、利用者も連れて移る。“かかりつけケアマネジャー”なのだ!彼らの奮闘ぶりを頻繁に見るにつけ、かかりつけ薬剤師よりパワーがあると感じる。

利用者の体調に合わせてベッドやマットを変えたり、入浴サービスを手配したり、その曜日の調節をしたり、そうこうしているうちに新しい病気が見つかって通院手配の必要に迫られたり、長く通っていたデイサービスで利用者がスタッフとけんかをして、「もう、あそこには行かない!」と言われてたり……と、ケアマネさんの心と身体が休まる日はない。

それでも、あそこまで力強く踏み込んでいく彼らの原動力は、「自分が利用者の方の生活を支えているのだ」という使命感と誇りなのだろうか。在宅ケアチームにとって、とても大事な熱源となる情熱家たちである。